竜に嫁いだ娘

yumenisiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜に嫁いだ娘

【Ｎコード】
Ｎ２０１０Ｒ

【作者名】
ｙｕｍｅｎｉｓｉｋｉ

【あらすじ】
時は流れて竜は成長を果たす
国を超え時代を超えて受け継がれる物語が今始まる・・
されど、それは悲劇の物語・・・
憎んでいたから・・・愛してしまった・・
運命に翻弄された姫が竜に嫁ぎ、運命が動き出す

シリアスだけど甘い感じの物語を目指していきます！！
本編「王の竜玉」の未来編となります。
本編読んだ後の方がご理解いただけるところが多いと思いますので、
ぜひとも本編を先にお読みください。
更新停滞中。本編の目処がつき次第更新予定。

暗殺の花嫁（前書き）

王の竜玉の未来編です。閃と神楽の息子とその花嫁の物語です。

見切り発車なのでどうなるか作者ですら分からない物語です。

暗殺の花嫁

晴れ渡ったある日
城の大広間では最上段に?国王である閃王とその王妃神楽が完璧な
正装に身を包み
その下段にはその長男である竜祥(りゅうしょう)が婚儀の服装に着替えて座っている
間もなくで来る紗萄国の姫、紫紋(しもん)姫を花嫁として迎えるために

「紫紋様のお越しにございます」

兵の声に広間にいた官吏達と将軍達は平伏した

厳かな曲が流れ紗萄国の国旗を掲げた兵が最前を歩き
女官達が貢ぎ物を掲げながら、その後を真っ赤な絹の生地に金の糸
で鳥が刺繍されたドレスを纏った
花嫁がしずしずと歩いてくる

顔にはベールがかけられその顔を見ることは出来ないが
洗練された動きに深窓の姫であることを実感させた

竜祥の前で兵は止まり、女官達も足を止めた
ただ花嫁だけが歩みを止めず竜祥の一歩手前まで歩みを進めた

「竜祥殿下こちらが紗萄国の姫、紫紋様にございます。」

紗萄国の大臣がいそいそと紫紋の紹介をする

「遠路はるばるよく来られた、紫紋姫。よろしく頼む。」

竜祥は穏やかな声で紫紋姫をねぎらった

女官達が紫紋姫に近づきベールをあげた

紫紋姫は化粧のせいか教えられた年齢１５歳より少し上に見えるが

竜祥を見つめる瞳は真っ直ぐに何かを決意している瞳であった

そのまま紫紋は足を進め竜祥の隣へと座る

そして最上の段にいる王と正妃に竜祥と共に平伏する

「紗菊国と？国がこの婚儀で永久の友好を」

「「「「永久の友好を」」」」

閃王の声に兵達が一同に声を上げた

誰もが王に対して平伏している

「紫紋姫。よく来られた。息子のことよろしくお願いします。」

正妃神楽の声にピクリと紫紋姫が顔を上げた

神楽を見つめる瞳に強い意志がともった

紫紋姫は袖に手を伸ばし何かをとりだした

キラリと光るそれを手に掴むと

数歩前にいる神楽に向かって飛びかかった

その手に鋭利な小刀を持って・・・

憎しみの刃

「父上の恨み！！！！」

小刀を持って駆けだした紫紋姫は
目の前にいる夫の母神楽に刃を向けた

ガッキィィィン
金属音が響くと小刀が跳んだ

「捕らえよ！！」

「ぶ、無礼者！！」

「反逆者だ！！」

叫ぶ臣下達を尻目に神楽は竜祥によって取り押さえられた紫紋を見つめる

刃が向いた瞬間、竜祥が紫紋の羽織を掴んで紫紋の歩みを止めさせた
刃は神楽が持っていた扇によって飛ばされた

王である閃はすぐさま神楽を引き寄せたが
それを神楽は手で制した

「父上の敵！！！我が恨みを思い知れ！！」

取り押さえられても瞳の憤怒は消えることはなく

ただひたすらに見つめてくる

「姫様！！姫様！！」

紗蔔国の兵達はすでに捕らえられ、ただあたふたとしている

それを見る限りでは彼らは何も知らずただ姫の単独行動だと分かる

「何故このようなことをなさる？紗蔔国は我が国と争いたいのか？」

騒がしい中、王妃の声にその場は静けさを取り戻した

「知れたことを！！あんたのせいで我が父は！！・・・殺してやる！！」

「死ぬのはあんたの方だ。紫紋姫」

紫紋姫の血を吐くような声に応えたのは凍えるような閃王の一声だった

「一国の王妃に刃を向けるなどあってはいけぬ。ましてや我妻ぞ。罰を受けるはそなただ」

「なら殺しなさい！！生きていても戻れぬ身、最後まであがいてみせる！！！」

幼い少女とは思えぬ程の力強さに竜祥の手も力を入れる

誰もがことの成り行きを静かに見つめた

そのピーンとした空気を破ったのは

「ならば、竜祥。この者を娶りなさい。」

「「はぁ？」」

夫と子供の声が重なった

「竜祥。女はこれだけの敵の中でも物怖じせず、度胸のある女の方がよい。良き妻になりそうだ。」

笑う神楽に誰もが開いた口がふさがらず刃を向けた紫紋さえ呆然と見つめていた。

初夜での出来事（前書き）

題名に反して全くエロくありません。
期待されましたら、ごめんなさい。

初夜での出来事

「・・っぅ・・・」

ガンガンと痛む頭に手を当ててゆっくりと上体を起こす

「・・・ここは・・！！！はっ！！！！」

バッと周りを見渡し身構える
すでに外は夜なのか窓は暗くなり
部屋は蝋燭によって赤々と部屋の中を照らしている
周りは多くの？国の調度品に溢れ、どれも一級品だと分かる
紫紋がいるのは寝台の上
恐る恐る何か武器になるようなものが目で捜す
すると寝台の傍の台の上に先ほどまで持っていた小刀が乗っている
すぐさま手を伸ばして胸元に抱きしめる

「はぁ。」

大きく息を吐いて先ほどのことを思い出す
？国との同盟のための婚儀での花嫁は刃をとりだした
暗殺は未遂となり取り押さえられたが
殺そうと思った夫になるはずの竜祥の母親、神楽に息子の花嫁になれと言われ

（何が嫁になれよ！！なれるわけないでしょう！！あんな男に嫁ぐなんて！！）
何かが紫紋の中でキレた

最後の力を振り絞って取り押さえている竜祥の手を振りほどこうとした

竜祥も母親の突拍子もない発言に取り押さえていた手に力が緩み、紫紋を取り逃がしてしまう

「ふざけるな！！キサマなど！！」

ドンっ

首元に襲う打撃に意識が遠のいていく

薄れ行く意識の中、最後に優しく抱きしめられる温かい腕に懐かしい父親を思い出させた

ガッチャ

ビック！！！

いきなり開いたドアに紫紋は全身で驚いた

「・・あっ・・気づいたか？」

ドアを開けたのは夫になる予定だった竜祥が立っていた

ゆっくりと寝台へと近づく

「こ、来ないで！！何なの貴方は！！私は貴方の母親を殺そうとし

たのよ！！」

胸元に握りしめていた小刀の切っ先を向ける
力みすぎて小刀が震える

「そんなに力んでいたら、狙いがつけられない。ゆっくりと深呼吸をするんだ」

身体の一歩手前で止まり腕組みをして、まだ幼き姫を見る

化粧が乱れて幼さが顔を出す
ガタガタと震える様は小動物のように可愛らしい

「だから、そんなに震えていたらダメだって」

「そ、そんなことは・・・」

紫紋の言葉はそれ以上紡げなかった
離れていたはずの竜祥が一瞬で近づき、小刀を掴む手首を掴まれた

「ほらすぐに捕まった」

優しく笑いかける竜祥の笑みに紫紋の緊張は限界を超えた
大きく開いた瞳からポロリと雫が溢れだした
一つ・・一つ・・落ちる度に
唇を噛みしめ嗚咽を堪える

「何があるのかは知らない。今は全て忘れて泣けばいいよ。」

憎い人の子供なのに、この声が、接し方が父様に似ている

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん」

張り詰めた緊張感から解き放たれた紫紋は大声で泣いた

娘の決意

どこか遠くでチュンチュンと鳥の鳴き声がする
ふっとあがった意識の中、日の暖かさが感じる
体が休息を求めているが
日の光についつい瞼をあげてしまった
パチパチと何度か瞬きをして
バッと文字通り飛び起きた
慌てて周りを見渡すがこの部屋には自分一人しかいないようだ

「はぁ～」

思いっきり溜息を吐いて思い出してきた
あの後大声で泣き、頭を撫でる手の温かさに負けていつの間にか眠ってしまった

（もうヤダ・・・ホント、何やってんのよ！！私！！あり得ない！！あり得ないから！！！敵の前で無防備に泣くなんて！！あぁ！！本当に時間を巻き戻して欲しい！！）

掛け布団の上に上体を倒してボスッボスッと拳で叩く

（涙を流すことなどとうの昔に忘れてしまったと思っていたのに、・・・あいつが悪いの！！あいつが！！頭撫でたりするから！！そうよ！あいつは敵！！我が祖国の敵なのよ！！）

哀れ布団。悲鳴をあげることが出来ない布団はサウンドバック状態で叩かれ続けた

「紫紋様。お目覚めのお時間でございますよ。紫紋様。」

遠くの扉で自分を呼ぶ声がする

ふと顔を上げると紗菊国から連れてきた女官達が次々に入ってくる

「紫紋様。ご無事でしたか！」

紫紋の乳母であった睡蓮（すいれん）が寝台にいる紫紋に駆け寄ってきた

「何故あのような・・・あのようなご決意があったなら、どうして私に話してくださらなかったのですか。姫様の代わりに私が命を賭してでも遂行いたしましたのに・・・」

「睡蓮・・・」

「そうです。姫様。私たちも覚悟して参りました。姫様のためならこの命捨てられます。」

睡蓮に続けと紫紋の傍に女官達がやってくる

「みんな・・ごめん・・・私のせいで・・・。みんなこそ何もなかった？大丈夫だった？」

目に溜まる涙を認めたくなくて話をそらそうとする

「私たちは昨日のあの後、一度は牢に入れられましたがあの化け物に姫様の世話をするようにと牢から出されました」

睡蓮が言う化け物とはこの？国の王妃神楽のことだ

紗蔔国にとってはこの神楽という存在は禁忌（タブー）だった
紗蔔国をたった一人で敗北に追いやった化け物として、上流階級の中では特に恨まれていた
「あいつが！何を考えているの・・・」
婚儀の間で暗殺をしようとして飛びかかったときの王妃の顔を見た
王の傍で笑う姿は、御年４０を越えた女とは思えぬほど若かった
あれで６人の子持ちと考えるとますます化け物だ
紫紋が王妃のことを考えていると
「紫紋様。王妃様の伝言を預かって参りました。入室の許可をお願いします。」
扉の向こうから紫紋に対して入室を求める声が聞こえる
「このようなときに！姫様。ここは断りましょう。」
睡蓮が早速断ろうと立ち上がると
「よい。構わぬ。会おう。されど少し着替える時間が必要だ。待たせておいて。」
寝台から降りてスタッと立ち上がった紫紋は寝間着の腰紐を取り始めた
それに慌てて女官達は姫の衣装を用意し始めまた

（あやつが何を考えているのか知らない。だから敵を知り、必ずこの思いなし遂げる！！）

女官が広げる衣装に袖を通しながら紫紋は決意を新たにした

娘の決意（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
一週間に一回の更新を目標に頑張って更新していきますので、よろしくお願いします。
感想などございましたら、お願いします。

周りは敵だらけ

唇に真っ赤な紅を引き終わり、ゆっくりと瞼をあげる
鏡に映った背伸びをした自分の顔

真っ赤な紅が浮いているようにも思えるが
今から真っ向から敵に会う
だったら完全武装でなくてはいけない
敵はこの国の最高権力者の妻、？国の王妃神楽

心臓を打つ鼓動が早い
落ち着けるために大きく深呼吸をしてゆっくりと椅子から立ち上がり

「行きます。」

意を決して外に繋がる扉へと足を向けた

呼びに来た女官が導くままに歩みを進める紫紋達は
敵前の前に興奮を抑えることに必死になっていた

貴婦人としてのたしなみであるゆっくりとした歩みではなく、少し
早足程度の歩みとなっていた

だがどうしたわけか、どんどん王宮の建物から離れていく
煌びやかな朱色の建物から離れ、靴を履かされた

「本当にこちらか？」

正妃の間が王城内部にあるはずなのに、何故靴を履く理由があるの

かと乳母である睡蓮が声を上げた
そんな睡蓮を見越したかのようにうっすらと笑った女官は
「王妃様はこちらでご政務の真っ最中です。ただ一言申し上げます。我々の王妃様にどんな理由があろうと刃を向けた貴方様をこの国は消して許しはしないことをゆめゆめ忘れませんように。夜は特にお気を付けください。」
女官が言い終わると同時に警護に当たっていた兵達の剣が鳴った
女官の口は笑みを浮かべているが瞳は怒りが含まれていた
そして周りの兵からも怒りが感じられる
紫紋達は息をのんだ
あまりに堂々とした脅迫にこの女官を責めるはずの者はいない
ここでこの女官を責めるようなことがあれば、この周りを囲む屈強な兵達の剣が抜かれる可能性がある
背筋に冷や汗が伝う
「さぁこちらです。ついてきてください、紫紋様。王妃様がお待ちです」
有無を言わせない女官の導きに紫紋達は命をかけて歩むこととなった

男装の王妃

靴を履き進むと大きな建物が建っていた
側面にたくさんの窓があり、日差しを遮る薄い衣が風に乗って揺られている

正面の入り口では白い衣装を着た者達が慌ただしく出入りしている
男性がいることに紫紋達は慌てて扇で顔を隠す
貴婦人のたしなみとして家族、親族以外の男性には顔を見せてはいけない決まりがある
もし不埒者が娘に手を出すといけないのと、顔を見せないことで神秘性が増し噂が広がれば上流階級に嫁げる可能性があるからだ
すでに嫁いでいるとはいえ、昔からの決まりに体が動き急いで扇で顔を隠す

だが、そんなことは一切気にせず道案内の女官はスタスタと入り口目指して歩んでいる

「待って!!」

呼び止めることも出来ず、歩み続ける女官を必死に追いかけて意を決して入り口へと飛び込んだ

つぅぅんと独特の薬草の香りに血の匂い
むせ返るような匂いに今すぐにでも引き返したいが
敵が真っ向から呼び出したのだ
ここで逃げるわけにはいかない
姫としての意地と敵を憎む憎悪から紫紋の足は前へと進んだ

「王妃様。紫紋様をお連れいたしました。」
女官が大勢の人だまりに向かって声をかけた
するとそこにいた者達は一斉に紫紋達を見つめた
大勢の男達の視線に慌てて紫紋は扇で顔を隠す
ザワザワとざわついている
声の中には紗菊国や紫紋など単語が聞こえる
臣下達が自分たちのことを話すなどこれほどの辱めがあるだろうか
唇を噛みしめ、扇を持つ手が震えてくる
「こらこら初々しい息子の嫁を虐めないで！！」
忘れることのない声が聞こえたと思うと人垣が割れて男性が着る衣装を纏い、髪を結い上げてこちらに歩んでくる王妃神楽がいた
開いた口がふさがらないという言葉があるがまさにその通りだ
一国の王妃が大勢の男達の中で男装をしているのだ
「おはよう、いやだいぶ日も昇っているからおそようかな？」
笑みを浮かべる神楽にやはり４０を越え大勢の子持ちの女性には見えない
あまりにも若すぎる。紫紋と少し年の離れた姉妹といっても誰もが信じるだろう
「急に呼び出してすまなかった。少し話しがしたいと思って。・・・翔大！！後は任せても大丈夫？」
紫紋に向き合っていたが人垣に声をかけ一人の男性が出てくる

「はい！お任せください！！それより・・・」

「心配するな。ではここを任せたぞ。・・・では、紫紋姫。こちらは人が多いからこちらにどうぞ」

「王妃様！！その様なこと我らが！！」

「気にしないで。私が好きでやっているのよ。」

紫紋達を連れてきた女官が慌てて止めようとするが、神楽の笑みに頬を真っ赤に染めて顔を伏せてしまう

「・・・はい。王妃様」

可愛らしく返事をする女官の頭を撫でて神楽は歩み出した

頭を撫でた瞬間何処からかキャーーーと悲鳴が上がった

紫紋達は前で繰り広げられる光景にただ黙ってついて行くしかなかった

王妃って??

ついた先は後宮の最奥の王妃の間であった
そこは王妃の間というには簡素なほど調度品がなかった
生活用品が置かれ、まるで中流階級の奥方が頑張って作ったような部屋内部だ
だが置かれている調度品は簡素であるが一級品である

「さぁさぁ入って!!」

呆然と部屋の内部を見つめる紫紋達に声をかける神楽
声に促されるように部屋に置かれた椅子に腰をかける
目の前の黒の丸机に二匹の黄金の竜が掘られている

「ふふっ。簡素な部屋で驚いた?」

「えっ・・」

「ごめんなさいねぇ。本当だったら王妃の待ってものすごい豪華なんでしょうけど、そういうの苦手なの。質素な方が好きなの。貧乏性でしょう?」

笑顔で話しながらお茶を用意する神楽に紫紋は呆気にとられていた
昨日間違いなければ私はこの人に刃を向けた
殺すつもりで刃を向けた
今も帯の下に隠した小刀をいつでも抜けるようにしている

「その剣は抜いちゃダメよ。抜いたら夫が怒ってしまうわ。・・・はぁ、話していたら来たわ。」

慌ただしい足音が近づいてくると思ったらバンと音を立てて扉が開いた

「神楽！！！！！」

全力疾走してきたのだろうか息も絶え絶えに？国王が叫んでいた
あまりの怒気に紫紋の女官達は腰を抜かしてしまった者もいる

「あらあら」

暢気な声と共に立ち上がった神楽は腰を抜かした者の傍に寄って

「大丈夫？」

声をかけた女官は一瞬は差し出された手に縋ろうとしたが、差し出した人物が誰かを思い出した瞬間その手をはね除けていた
バシンと響いた音と同時に部屋を包み込んだ殺気

「ひぃぃっ」

悲鳴をあげて紫紋達の女官達は腰を抜かしてしまった
紫紋ですら顔面蒼白で殺気を出している人物に目を離すことが出来ない
ゆらりと動いた閃王は腰に差して剣を抜いた
誰一人として動くことが出来ない
イヤ呼吸すらうまくできない
閃王の黒き眼がたった今妻の手をはたいた女官を捕らえている
見つめられた女官は両目から涙を流し、ガチガチと震えて歯が鳴っている

「この馬鹿！！今すぐその殺気を引っ込めなさい！！」

ゴンと王の側頭部に軽めの手刀した神楽によって一瞬で殺気は消えた
それでも部屋に残った嫌な空気が包まれている
心臓を鷲掴みされたような心底冷えるような怖さに誰もが怯えた
そんな空気を全く気にした様子もなく神楽は

「ったく！誰よ！！王を呼んだのは！！それに何やってるの！！さっさと仕事に戻りなさい！！今日は他国との会議の日でしょう！！」

幼子をしかりつけるかのように腰に手を当てて怒り出す神楽に
有るはずもない尻尾と耳が王に見えるような気がする
ショボーンとしなだれて怒られた子犬のようだ

「だけど・・・神楽・・・。」

叩かれた手を取り優しく撫でている
ゆっくりとした撫で方は愛撫にも似た動作だ
それでも神楽はにっこり笑って

「まじめに仕事しなさい！！」

撫でられていた手をスルリと外して外を指さした

「！！！！！」

大きく開いた眼は先ほどまでの殺気は消えてしまった

王妃って??

「そうですよ。父上。早く仕事に戻ってください。」

開け放しの扉からゆっくりと入ってきた青年は呆れ顔だ

「竜祥遅かったですね。」

「母上。遅くなったこと大変申し訳ありません。どこぞの高貴な方が雲隠れしましたので、私の所に大量の書簡が回されて、遅くなりました。」

王太子である竜祥より高貴な方と言えば限られた存在だ。
この世に二人しかいない。

「・・・・・・・閃?」

妻の満面の笑みに王は固まる

「・・・仕事行きますよね?」

「だ、だが神楽!!この者は昨日君に刃を向けた存在だ!!この国の反逆「それ以上言えば例え父でも許しませんよ!!」

慌てて神楽に弁明しようとする王の言葉を遮ったのは竜祥だ

「父上。この者は我妻となった者。妻を悪く言うものを夫は許す者ではないと父から教わったものだと思っていましたが、違いますか?」

「素晴らしいわ！竜祥！！さすが私の息子だわ！！」

パチパチと両手を叩きながら笑みを浮かべる神楽に閃は詰まるしかない

「・・・ふ、ふざけないで！！私はあなたに刃を向けたのよ！！それを許されようなんて思ってはいないわ！！処刑でも何でもすればいいわ！！」

紫紋は親子のやりとりに呆れて聞いていたが、竜祥の「妻」という言葉に反応して慌てて声を張り上げた

「・・・そこまで覚悟があるなら処刑を「そんなことはさせません。」

ここでもやっぱり王の言葉を遮るのは神楽だ

「一つお聞きしたい。紫紋姫。何故貴方がそこまで私を憎むのですか？」

ゆっくりと紫紋に近づきながらその視線を絡ませる

キッと睨んだ紫紋は絶対に視線を外したりはしない

「貴方を憎む理由ですって！！アンタが私の人生を・・・父を家族を無茶苦茶にしたのよ！！」

ダンと机を叩いて立ち上がった紫紋に動じることのない王夫妻に夫がいる

憎む敵に見つめつつ握った拳が怒りに震える

張り詰めた紫紋の表情に真っ向から向かわなければいけないと神楽は思った
ゆっくりと胸を張り、気品ある姿勢をとり王妃の仮面を被る
「女官達、下がりなさい。兵も下がりなさい。閃(あなた)も「ダメだ。これほどの敵意を向けている者がいるのに下がれない。君を置いてはいけない。いいね。」

王妃の神楽は王には勝てない
有無を言わせない声に神楽も諦めて閃と息子に席を勧めた
女官達と兵達を下がらせて王妃自ら茶を用意させた
睡蓮が用意しようとしたが神楽が断った

その間何とも言えない空気がその場を支配した
神楽の席の横で閃王がじっと紫紋を見ている
冷徹な眼差しに紫紋は冷や汗が流れる
机の下では震える手を必死になって押さえている
喉がカラカラでゴクリと息をのんだ時だった
手に自分とは違う体温を感じた
下を見ると手を覆う大きな手がある
その先を見てみると自分を見つめる敵の息子がいた

払いのけたいはずなのにその体温が離れがたくて振り払えない
触れていて欲しいと思ってしまう
外すことの出来ない視線で竜祥はにっこりと微笑んでくる
かぁぁぁっと顔に熱が集まってくる

カタンと神楽が椅子に座る音と共に急いで視線を反らした
あの瞳は怖い
全てを見ているようで、自分の全てが見られている感じがする

早まる心臓を押さえるために大きく息を吐き出し
真っ正面から神楽（てき）に向き合った

姫の過去

「私は本当は紗菊国、第一太子であった駕燎(がりょう)が娘です。覚えてございましょうか？我が父を。」

「駕燎？誰だったかしら？ましてやあなたは紗菊国、駕黎(がれい)国王の娘ではないの？」

「誰があんな男の娘な者ですか！！！我が父をお覚えではないのですね・・・・。」

「駕燎・・・・。覚えている。」

静かな閃の声に神楽と紫紋は目を向けた
竜祥だけが何かを考えるように出された茶をすすっていた

「閃？駕燎って人を知っているの？」

「あぁ。今王太子だったと聞いて思い出した。二十年以上前神楽が初めて仮面を付けて戦ったときの敵国の大将だった。」

「えっ？」

「覚えているか？あの時のこと？お前が山を崩して敵陣に殴り込みをしにいって捕まえてきた男だ。」

「・・・そうよ！！あの時戦場に出ていたのは我が父！！あれは父が悪いわけではない。あの時までは紗菊国の方が有利だった！！アンタさえ出てこなければ！！！」

「確かにあの時神楽が出てこなければ？国は敗走していただろう。」

「あの時捕まえた・・王太子の娘・・・」

「そうよ！！あなたのせいで父は第一王太子の座を辞さねばならなかった・・・。その後は惨めだった・・・。皆が指をさして笑った・・昨日までペコペコしていた奴らが指をさして笑っていた・・・。私が生まれてからもそうだった・・・。母は私を生んだ後に心労がたたって死んでしまった・・・。父は必死になって紗菊国のためになるように働いてきたけど、誰からも認められることはなかった・・。臆病者、紗菊国の恥さらしと罵られてきた・・・。小さい頃の私は惨めだったは・・。王女でありながら馬鹿にされて・・・。」

一気に言い放った紫紋は目頭に集まる雫を押さえるために唇を噛みしめた

口の中で生暖かい鉄の味がする

唇が切れて血が滲んでいるようだ

「それ以上噛むな」

横から伸びてきた指に唇が触れられる

傷口をなぞるようにゆっくりと唇を往復する指

噛みしめるものが無くなってあふれ出す涙を、同じ指が掬い取った

「・・・何で・・優しくするの・・・。こんな事しないでよ！！私は父の敵が討ちたいの！！あなたの母親を殺し」

ダーーーン・・・

紫紋の言葉は閃の台を叩く音で遮られた

ビックと体を震わせて王を見ると台を叩いた拳が震えている
身も凍るような怒気と殺気が先ほどの比ではないほど溢れている
紫紋と睡蓮はこの怒気と殺気だけで殺されると思った
横から庇うように竜祥が前に出ていなかったら椅子から転げ落ちていたと思う
それほどまでに怖かった

「・・・何も知らぬ小娘が！！！言いたい放題言いおって！！何が復讐だ！！何が惨めな思いだ！！神楽がどれほどの思いで剣を握り、あの戦場に立ったのかも知らぬくせに！！自分だけが悲劇の人物などと思うな！！」

今にも剣をぬき飛びかかってきそうな王の声に紫紋の喉からヒッと怯えた声が上がった

「閃、今話していることは私のことではないわ。この姫のことよ。話をそらすのは止めて。」

「だが、神楽！！この者は君がどれだけ苦しんだかを知らない。自分だけが被害者のように言い、一方的な言い分だ！！何も知らぬくせに言いたいことだけを言うな！！」

あれだけの覇気を持つ王が悔しそうに顔をゆがめて見つめてくる
自分が知らない何かがあるのだろうか？
自分の知らないことって何？敵の苦しみって何？
何故そうやって悲しげな顔をするの？あなたは敵でしょう？憎む敵でしょう？

「何よ！！アンタがどんな思いしたか何て知らないわ！！そんな顔しないでよ！！」

傷ついた敵（かぐら）の姿に頭が混乱してくる

ガタンと椅子から立ち上がりそばに来る

「私はこの？国の王妃としては頭を下げ詫びることは出来ません。もし私が詫びてしまえば私を信じて戦い命を落とした者達を蔑むことになります。だから・・・私はあなたには謝れません。ですが・・・ただの一人の人として神楽としては本当にごめんなさい。私は・・・あなたの運命をねじ曲げてしまいました。本当にごめんなさい。」

床に手をつき深々と土下座した敵に紫紋の限界は超えた

「ふざけないで！！謝って欲しい訳じゃない！！私は・・私は・・・」

混乱がピークに達して後ろから伸ばされた手に気づかなかった

伸ばされた手に引っ張られて後ろに倒れていく

コツンと背中に当たった温もりに目の前を覆った大きな手の闇に意識は持って行かれた

「考えるな・・・今は休め・・・」

意識を飛ばす最後に聞こえた声が全てを包んでくれるようだった

王太子の想い

「父上。母上。姫を部屋に連れて行きます。」

意識を失い力を失った紫紋を抱き上げ、目の前にいる両親に声をかける

「竜祥！！その女を！！「父上。この者は我が妻にございます。未来の皇后です。私が唯一望む妻です。この気持ちは一番あなたが知ってるはずです。睡蓮、姫の部屋の用意をしていろ。」

今まで気丈にたっていた睡蓮であったが、神楽が土下座したときから腰を抜かして床に座り込んでいた

この場には両親だけを残したかった竜祥は睡蓮を部屋から出して自分も早々と部屋から退室した

扉を閉める瞬間

「ごめんなさい・・・」

「君のせいじゃない」

泣く母を必死になって慰めている父親の声が聞こえた

寝台は昨日と同じように用意されていた

ゆっくりと紫紋を寝台に横たえながら目元に溢れた涙を払う

「・・・君をこれから何度も傷つけることになるかもしれない・・・
それでも俺は・・・君を失いたくない・・・。」
愛おしそうに撫でる姿に睡蓮は意を決して声をあげる
「申し上げます。殿下は我が紫紋姫をどうお思いなのでしょうか？」
睡蓮を見つめる皇太子の瞳は冷たかった
先ほどの王と何ら変わらぬ冷たさに睡蓮の背筋は冷え冷えとした
「・・・紫紋は我妻だ・・・それだけだ・・・」
たった一言それだけを残して竜祥は紫紋の部屋を後にした

姫の憂鬱

それから1週間の時が過ぎた
紫紋は相変わらず自室に閉じこもり王妃(てき)について考えていた

王妃が頭を下げて詫びてきた
自分が最も望んでいたことなのに何故か心が晴れない
涙を流す王妃(てき)に自分が本当に正しかったのか疑ってしまう

(疑ってはいけない。父を貶めて母を苦しませて幾度泣いてきたことか・・・あいつは王妃は敵なのよ!!)

何度も浮かんだ答えを自分に言い聞かせる
そう思わなければいけない
なぜなら、紫紋を悩ませる事が起きていた

「紫紋様・・・その・・・また、竜祥様から・・・お届け物が・・」

言葉を濁しながら報告する睡蓮の手には抱えきれないほどの豪華絢爛な衣装や貴金属があった
あの王妃との対面以降その息子である自分の夫は毎日こうやって贈り物を贈ってくる
その内容は日によって違う物の明らかに高級品だと分かる
米神に手を当てて何度となく溜息を吐き

「私が袖を通すことはありません。見とうもない!!それを何処かにやって!!」

拒絶するように指示すると睡蓮はいつも道理に送られた物を紫紋の

目の届かないところに持っていく

（冗談じゃないは！！私を物でつるつもりなの？ふざけないで！！憎たらしい！！）

苦々しい想いで大きな溜息を吐き出した

「はぁ～～。」

「姫様・・・今日は天候もよく・・そのいかがですか？外に出てみませんか？」

昔からの付き合いである睡蓮がふさぎ込んでいる紫紋に声をかけてくる

「そうねぇ。」

紫紋の機嫌とは裏腹に空は雲一つ無く晴れ渡っている

「ここにいても何も始まりません。敵情視察と行きましょう。」

笑いかけてくる睡蓮に何らかの理由を付けて紫紋を動かそうとするここ数日鬱ぎ込んでいる姫の姿に乳母として心配をしていた

「そうね。睡蓮の言うとおりだわ！相手のことを知らなくてはいけないわね！！」

勢いよく立ち上がり扉をくぐり抜けた

「ふぅ～～晴れ渡った空～～～」

重い空気を吐き出した
久々の空に笑みが浮かんでくる

外は王太子の庭が広がっている
色とりどりの花が咲き、大きな池の中には鯉が泳ぎ、正に楽園という物を地上に作ったかのように存在していた

「綺麗な庭ですねぇ～～」

惚けたような声を出す女官に眉を寄せるが、認めるしかないほど確かに凄かった

「にして、あちらから声がしますね。」

睡蓮が言う方から確かに声のキーが高く女性の声のようだが、どうも何か違う
声の方に釣られるように紫紋達は足を進めた

男装の麗人？

「「「「「はっ」」」」」

「「「「「てぃやぁ！！」」」」」

乱れることのない動き
無駄のない動きで棒を突きだし、軽やかに動き洗練された動きに目が奪われる
軽装であるが鎧を着た者達が訓練をしていた

「なっ！！このような場所で武器を扱うなど！！」

睡蓮が声をあげる
確かに王宮の最深部に近い場所で軍事訓練をすることなどありえない

紫紋もただ呆れてその訓練に目を向けていた
そこでふと目があった
訓練の指示をしている背の高い黒い鎧を纏った方だ
表情は見えないが視線はあった
こちらに気づくとぺこりと会釈し兵に指示をしてこちらへと向かってくる

（えっ？何？こっち来るの？）

いきなり近づいてくる人影に慌てて懐から扇を出す
ぱっと開いて顔の前にかざす
ザッと土を踏む音が聞こえ鎧を着た者が目の前に着たことを知らしめた

ドッキと体を身震いして

（何で今日に限ってこんな事になるよ！！）

外に出たことを後悔しながらどうしようかと悩んでいると

「お初に目にかかります。義姉上！！」

そう呼ばれた声に紫紋は固まってしまった

「義姉上？？その声？？？」

「ふふふっ。紹介が遅れました。？国が一の姫瑠璃（るり）と申します。」

明らかに女性の声にかざしていた扇が下へ下へと下がり紫紋の視界を明るくした

そこには紫紋より頭一つ分大きな鎧を纏った人がいた

だが、その髪は長く後頭部で結ばれた髪は腰まであり、胸部には明らかな胸の膨らみがあり女性であることを示していた

「え？？えええええ？？？」

おもいっきりガン見してしまった紫紋は大声を上げてしまった

女性が鎧を着るなどあり得ない行為であり、ましてや確か先ほど訓練の指示を出していたような・・・・・

「ふふふふっ。お可愛らしい方だ。兄上が溺愛するはずだ。」

笑みを浮かべる姿はどこか竜祥に似ており心臓が音を立てる

「こちらは日差しが強い。あちらの東屋でお茶の用意をしましょう。誰か！誰かおるか！」

瑠璃の声にダダダダッと我先に女官達が集まってくる

「お呼びでしょうか！！瑠璃様！！」

「お前じゃないわよ！！私が呼ばれたのよ！！」

「イイエ私よ！！瑠璃様！！ご用は何でございましょうか？」

押し合いへし合いをする女官達に紫紋達は呆れるものの慣れているのか瑠璃は

「ありがとうみんな。あちらの東屋で休憩を取るから義姉上の分と一緒に茶の用意をしてくれ。お願いね。」

満面の笑みで頼むと女官達は目眩を起こしたかのようにフラリと身を一瞬だけ崩したが、女官としての意地で体制を立て直し

「「「了解いたしましたわ～～～～～～」」」

叫び声を残して走り去ってしまった

「フフフッ、可愛らしい方々だ。」

笑顔を浮かべる瑠璃に紫紋は

（天然なの？それともタラシ？？何ナノこの人！！無駄に垂れ流しのこの色気！！！）

同じ女人のはずなのに瑠璃から溢れる色気はまるで男のように凛々

しく、雄々しく、心ときめかすものがあった

「義姉上。行きましょう」

そう言って出された手に紫紋はついに意識せずに手を差し出してしまった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2010r/

竜に嫁いだ娘

2011年8月8日22時49分発行